

## 自立活動に教科の活動を取り入れた実践～通級指導教室にて～

提案者 矢板市立泉小学校 教諭 高橋 澄子

### 1 はじめに

前任校のつづき教室は、自閉症・注意欠陥多動性障害通級指導教室である。目指す児童像「自己の特性を理解し、自分なりの方法で学習に取り組める子」「進んで活動し、安定した気持ちで活動できる子」「ルールや規律を守って行動できる子」の育成に努めている。担当していた10名ほどの通級児童の主な指導の重点は、「心理的な安定」や「コミュニケーション」であった。

低学年では、主に「何を理解しているか、何ができるか」を見定め、具体的な活動や体験を通して、生きて働く「知識・技能の習得」を目指した。その際、当該学年の教科書を活用することで在籍学級での学習に自信がもてるようになるのではないかと考えた。中高学年では、主に「理解していること・できることをどう使うか」を見定め、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」を目指した実践をまとめた。また、通級児童は、比較的語彙が乏しいので「話す活動」を計画的に取り入れた実践についてもまとめている。



### 2 提案内容

#### (1) 生きて働く「知識・技能の習得」を目指して

○取り入れた教科と単元名

- ・1年算数「かたちづくり」より色板や数え棒で形を作る活動（2年生児童対象）

図工「カラフルいろみず」

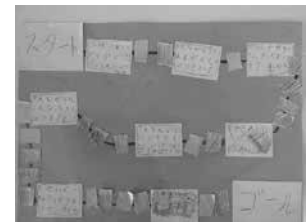
- ・2年国語「馬のおもちゃ」、算数[学習のしあげ いかしてみよう(長さ、かさ)]・・・

生活「自分のことをまとめよう」、図工「まどをあけて(カッター)」

体験不足を見極めるため、ページやカードをめくる活動を取り入れたり、ハサミやのりを使用したりすることもあった。

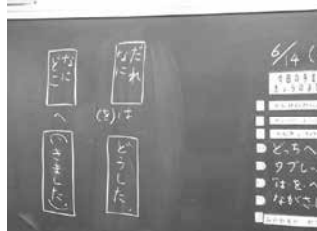
「カラフルいろみず」をアレンジし、「混色」と表現を変えて、中高学年の児童にも取り入れた。

「心理的な安定」を主な指導の重点にしていた児童からは、「こぼしたらどうするの。」という声を聞くことができ、「失敗はしてはいけないもの」という先入観をもっているのではないかとこの考察にたどり着くことができた。



#### (2) 語彙の拡充を目指した話す活動(担当者と交互に10文程度話す)

- ・助詞を意識しながら文で話す。
- ・学校や家庭での出来事を「いろんなきもち」で伝える。
- ・国語「漢字の広場」「言葉のたから箱」



(3)「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」を目指して

①4年 A 児の例（主な指導の重点「コミュニケーション」）

・実態・・・△遅刻が多く、通級もままならない。

○道徳では本人なりの考えをワークシートに書き、発表もしている。国語の読解テストでは、70点程度の点数をとっている。

・取り入れた教科と単元名・・・国語「考えを伝える文章を書こう」「調べて話そう生活調査隊」等  
・授業までの手順

在籍学級での授業がある程度進んだところで、何人かの児童のノートを写真に収めた。その際、本児と同程度の理解力と思われる児童のノートを選び出し、指導に生かした。

②5年 B 児の例（主な指導の重点「心理的な安定」）

・実態・・・△ストレスから脱毛を繰り返す。

○算数や社会が得意。国語は苦手だが、「大造じいさんとガン」は公文でも学習しているからよくわかるという。

・取り入れた活動・・・「大造じいさんとガン」の「物語の魅力を伝えよう」という感想文を書く活動  
・指導の実際・・・仲の良い友達も含め、何人かの児童のノートを示す。在籍学級では5文以上書く縛りがあったが、3文で折り合いをつけた。

### 3 研究の成果と課題

(1)2年 C 児の場合

計算は得意だが、図形は苦手。図工では教室支援を行っていた児童であった。国語「馬のおもちゃ」では、説明文を読み取り、ホチキスなど様々な道具を使っておもちゃを作る支援をした。1月の紙版画の授業では、「何か手伝う?」と声をかけるも「自分でやる」と返ってきた。

(2)2年 D 児の場合

年度当初こんなことがあった。タブレットを抱えて「見せたい、見せたい」と言う。何を誰に見せたいのか聞いても「見せたい」と言うだけ。そんな D 児だったが週末の家庭での様子や、苦手な算数の授業のことも話せるようになった。

(3)5年 B 児の場合

自分の話したいことだけ話そうとする傾向のある児童である。交互に10文話す活動では、3文しか話そうとしなかったが、国語「漢字の広場」で話をしたいと提案するようになった。

(4)4年 E 児の場合

算数の授業は個別指導教室(さんさんルーム)で受けている児童である。ゲーム感覚のプリントを使って、コンパスの習熟を図ろうとした。支援が難しく、本人のモチベーションも下がり、その後プリントそのものを嫌がるようになった。

4月には教室支援で通級児の実態把握に努めた。その結果、学習の様子や掲示物から目標設定や指導のヒントを見つけ出すことができた。担任との連携の重要性を感じていたので、担任と情報共有が短時間でできるよう「スズキ校務」に通級の様子を記載するようにしたのはよかった。また、担任記載の日々の様子を見ることでも指導のヒントを見つけ出すことができた。

授業では、「聞く・話す・書く・読む」の4つの活動を組み合わせて行った。その中で児童の困り感を見取ることができ、「話す」活動の時間を増やすなど軽重をつけてきた。低学年担任を何度もしてきたことや支援学級担任を経験できたことは私の強みである。そのことを生かされるよう試行錯誤を繰り返してきた。これからも児童の困り感に寄り添い、「学びを人生や社会に生かそうとする(学びに向かう力・人間性等)の涵養」に努めていきたい。